

ドーハ日本人学校における現地理解教育 —社会科の実践を通して—

前ドーハ日本人学校教諭

宮城県加美町立中新田小学校教諭 鈴木 達也

キーワード：ドーハ、社会科、現地理解、教材開発

1. はじめに

皆さんは「中東」と聞いて、どのようなイメージをもつだろうか。私が派遣される前年度、ニュースを大きく賑わせていた言葉は「イスラム国」であり、私がつイメージは「何か怖い」であった。この「何か」という曖昧な気持ちは、中東やドーハを「よく知らない」ことが大きく影響していた。

人は、よく知らないことに関して、不安や恐怖を感じるものである。これだけ、グローバル化が進んだと言われる中でも、中東は私にとって、よく知らない地域であった。

そこで、まずは私自身が現地の様々な場所に足を運び、見聞を広め、理解することに努めた。その中で、新たな出会いや発見があり、それが教材として、子どもたちに伝えられるものになった。ここに、その概略を紹介したい。

2. 現地の人材・素材を活かした教材開発

(1) サードカルチャーキッズ

①ある家族との出会い

私は、毎週土日に、ボランティアで子どもサッカーのコーチをしていた。現地に住む日本人や外国人にサッカーの指導をする中で、サードカルチャーキッズに出会った。サードカルチャーキッズとは、両親の文化とは違う文化の場所で過ごす子どものことである。例えば、お母さんは日本人、お父さんはアメリカ人、しかし生活しているのは中国、といった子どもたちである。彼らの悩みは、「ここが地元」と言える安心できる場所がないことだと言われている。

ある日の練習終わりのことである。「この間、『夏休みに帰省するよ』と言ったら、『帰省って、どこに帰るの』って言われたんですよ。あの子にしたら、地元と呼べるところがないんですよ」と保護者との何気ない会話があった。

ドーハには、ハーフの子が多くいる。そして、仕事上の都合で、両親の文化とは違う第3の文化圏で生活をする子どもも少なくない。そのような子どもたちにとって、地元があるということは、特別なことなのだ。私は「地元がある」ということにうれしさを感じたことはなかった。それは、“あつて当たり前”のものだったからである。その当たり前のものが、急に当たり前ではなくなった瞬間の出来事であった。

② “地元”をテーマにしたインタビュー

郷土愛をテーマにした授業をするために、動画を撮影することとなった。地元がある有難さを考える上で貴重なインタビューになるのではないかと考えたからだ。その子は撮影にあたって「ぜひ、『地元があるって本当に羨ましいことなんだよ！』って伝えたい」と目を輝かせていた。撮ったインタビューの中で非常に印象的な場面がある。私が、「もし地元があつたら、何がしたい」と問いかけた場面だ。両手で口を覆い、表情がニコッと一変したのだ。「まずね、友達をいっぱい作りたい。2・3年では人とよくつながることができないから、たくさんつながって、助け合いたい」と話した。その子にとって“人とつながる”こ

とが地元の良さであり、それは地元があって当然の人たちに刺さるメッセージだと感じた。

(2) 校外学習先の開発

①2022 World Cup ボランティアの経験

ドーハの日本人コミュニティ内のサッカークラブに所属したことが縁で、2022 World Cup ボランティアに参加することとなった。これは、ドーハに駐在する各国のコミュニティ内から2名ずつ参加するプロジェクトであった。半年間にわたって、World Cup 成功に向けてカタールがどのように街を作っていくのか、どのように地下鉄を広げていくのかを現地見学したり、ディスカッションをしたりした。

②肌で実感した発展するドーハ

World Cup 成功に向け、まず着手したのは、インフラの整備であった。ドーハは、毎日至る所で工事が行われており、渋滞も日常茶飯事である。そこで、地下鉄と鉄道の2つが建設された。地下鉄は三菱重工が携わり、私はその試運転モデルに乗車した。また、どのように地下鉄の駅を張り巡らすのかについての話し合いに参加した。ドーハの中心地から郊外に広がっていく予定路線図を見ながら、このように街はできていくのかと実感した。

また、建設中のスタジアム見学も行った。天井が開いていても、冷房が効

き、涼しい中でプレーができる画期的なスタジアムだ。ドーハは夏場50度を超える猛暑であり、それを乗り切る工夫である。

③校外学習の実施

ボランティアの経験から、「World Cup に向けて発展するドーハ」をテーマに、スタジアム見学と地下鉄の乗車体験を行う校外学習を計画した。

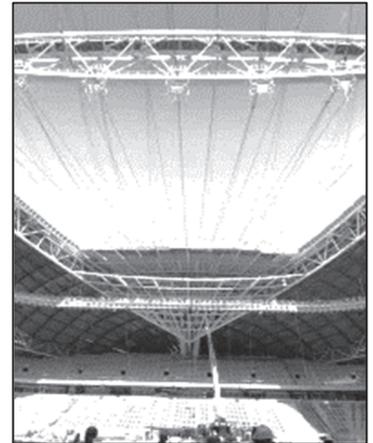
まずスタジアム見学は、ボランティアでお世話になった責任者に見学したい旨を伝え、担当者と連絡を取り合うことで実現した。また、地下鉄は駐在している三菱重工の方に連絡を取り、駅の見学と、乗車体験が実現した。

スタジアム見学は、非常に子どもたちの意欲を掻き立てた。そのスタジアムでは2か月前に、世界陸上が開催されており、400メートルリレーで日本代表が銅メダルを取ったコースを走らせていただくこともできた。記者会見室や、控室、ドレッシングルーム等、普段入ることができない裏側の設備を見せていただいたことも貴重な経験となった。

地下鉄乗車体験では、当日、三菱重工の職員の方が2名同行して下さることとなった。ブレーキをかけやすいように、駅が少し高い場所に建設されている工夫や全自動運転によるコスト削減の工夫等、遠いドーハの地で生きる日本の技術力に、子どもだけでなく、私までもが聞いていて、とても誇らしい気持ちになった。



地下鉄の予定路線図



World Cup 開催
予定スタジアム

3. 現地理解を取り入れた授業実践

(1) イスラム圏のゲストティーチャーを交えた話し合い活動

中学部3年、社会科「多文化共生」の学習において、本校で事務をしているスーダン人をゲストティーチャーに迎え、授業をした。

来日時に感じたことやトラブルを基に、文化や宗教、人種の違いから起き



体験談を聞き、メモし、
解決策を話し合う

ている問題点を一般化し、解決策を話した。

ゲストティーチャーには、来日時での体験談として以下の事を聞いた。

A：ハラル店（豚肉を使用しない店）が日本にも増加していてうれしく感じた話

B：英語表記の交通網が都市部では広がっているが、田舎にはなく悲しく感じた話

C：地下鉄で、肌の色（黒）の違いを見られ、とても嫌に感じた話

違う人種の方の話を書くことは、実感をもって課題を捉え、真剣に取り組むことができる点で有効であった。

ゲストティーチャーの体験談に聞き入っており、意欲的に取り組む生徒の姿が見られた。また、話していた内容も、日本人との文化や人種の違い等、問題点が分かりやすいものであった。

しかし、反省点もあった。ゲストティーチャーは、話した後、ただ生徒の話し合いを聞くだけになってしまった。折角の機会だからこそ、パネルディスカッション等、その後も日本人を外から見た視点で話し合いに参加してもらうことも必要だと感じた。

(2) カタールと日本の地図を比較する活動

小学部3・4年、社会科「交通の広がり」の学習において、教科書に載っている兵庫県の交通の広がり調べ、その特徴を発表し合った。更にカタールの交通の広がりとの共通点・相違点を地図の比較から発表させ、今後、カタールの交通網はどのように広がっていくのか予想させた。

主な都市は平地を中心に分布し、それらを結ぶように交通網があることに気が付くことができた。またその地域全体（東西南北）に広がることで、人や物の行き来が可能になっていることに気付くこともできた。

さらに、日本とカタールの地図を比較することで、どちらも都市部に交通網が集中し、広く伸びていることが分かった。日本の方がより交通手段が多く、交通の広がりも見られることから、今後、カタールがどのように発展するのか、日本をモデルに比較すると予想しやすかった。

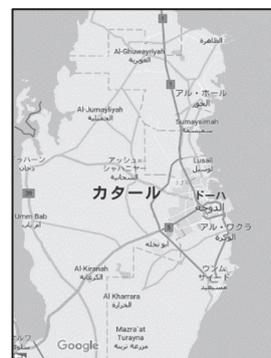
しかし、交通がより広がると、どのようなことが起きるのかまでについては考えを巡らせることはできなかった。交通が広がることでの、メリット・デメリットを話し合う活動を取り入れたりすることで、より交通の広がりに関して多面的に考えられる児童を育てることも必要だと感じた。

(3) 校外学習を通して、現地と日本を比較する新聞を作る活動

小学部3・4年の学習内容に関連付けて、校外学習の訪問回数を多く設定し、教科書で得た知識を使いながら質問したり、見学したりする中で、施設の秘密や働いている人の想いを肌で感じ、日本との共通点や相違点も理解することができた貴重な機会となった。

教科書で日本の施設を学んだ後の見学になる為、子どもたちには「では、現地ではどうなのか、聞いてみたいことを考えてみよう」と相違点に着眼させた。比較するものができることで、より深い学びにつながると考えた。また、事前に考えることで見学する際の目的意識もでき、必要感をもって質問できた。

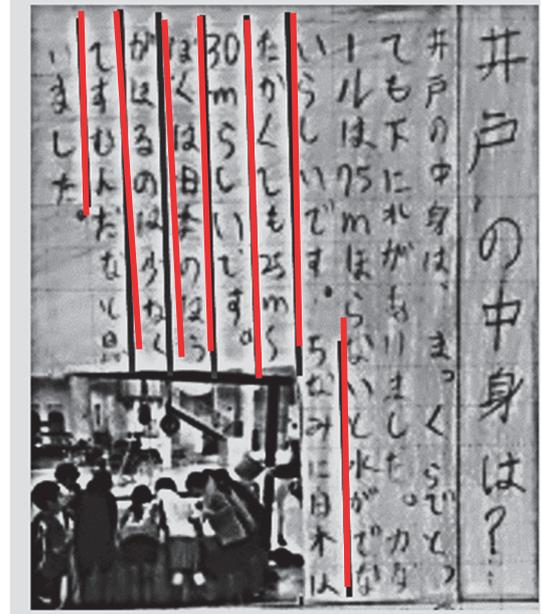
比較することで、互いの良さや課題が見えやすくなった。また、今まで一つの考えに縛られていた事象についても、多面的に考えたり話し合ったりできるようになった。



カタールの地図

日本とはちがって、図書館というより、ふ
 っうのおうち感が強いので、とてもなれ
 やすいようになっているのも、マクタバの良いと
 ころだと思いきまた。日本と同じところは
 ルールです。本と図書館を大切にすること
 ころは、どこも共通していることが分か
 ります。わたしはマクタバに行ってみて、少し本が

日本とカタールの図書館の違い



日本とカタールの井戸の違い

4. おわりに

3年間の実践を通して、教師自身が実際に足を運び、教材研究をする大切さを感じた。足を運ぶことで、まず自分自身が実感を持って良さや課題を理解できた。そして考えさせたいポイントや考える為に必要な材料が精選され、その分、子どもの主体的な活動に多くの時間を割くことができたように感じている。

私は、ドーハに派遣されたことで日本をより深く知りたいと思うようになった。それは、日本に住み続けていたら、目を向けなかったであろう、当たり前なのが面白く感じるようになったからである。海外での生活では、日本との相違点を日々実感できた。そして、国外を知ったからこそ初めて分かる国内の良さがあることにも気付くことができた。

今回の自身の経験を活かし、日本でも、「体験的活動の充実や比較・検討を行う授業」を通して「物事を多面的に視て、日本の良さを見つめ直す児童の育成」ができるよう、研鑽を重ねていきたい。